

旅人の讃酒歌に見える「醉哭(泣)」について

——阮籍の伝とのかかわり——

柳瀬喜代志

的としたい。

341 賢跡 物言従者 酒飲而醉哭爲師 益有良之

347 世間之 遊道余 冷者 醉泣爲余 可有良師
賢しみと物いふよりは酒飲みて醉哭するしまさりたるらし
世のなかの遊びの道にすずしくは醉泣するにあるべかるら

350 默然居而 賢良爲者 飲酒而醉泣爲余 尚不如來

默然をりて賢しらすは酒飲みて醉泣するになほ若かずけり

まず、三首の類型的表現に気づく。「醉泣」という行為と、「賢しみと物いふ」、「世の中の遊びの道」、「默然をりてさかしらす」の行為とが対立したものと捉えられているようだ。^{注3}そして、「醉泣」を相対的価値行為とみるようである。それは、普通に「さかしら」と認められている事柄に対する否定を表現するものであるといえよう。否定の論理で、「醉泣」の行為は賞讃されている。それは消極的気分をただよわせるとは言え、そこに旅人の用語に注意して、それに託した旅人の心情を把握することを目

問語」の条に、七言詩がある。

そこで、この小稿は、讃酒歌の内の三首に見える「醉哭(泣)」

万葉集卷三に、「太宰帥大伴卿讃酒歌十三首」(三三八～三五〇)がある。それは、集中の他の酒の歌や、記紀の歌謡の多くが折々の饗礼に応じた酒宴を敘するのと、大いに異なる。旅人の讃酒歌は、旅人個人の内面の世界を物語らんとしている。忘憂、遣情の物としての酒に無上の価値を認め、飲酒の行為の中に己れの生きかたをみつめようとしているようだ。それは、老身の旅人が都遠く太宰府の帥に赴任して、その地に妻を亡くした神亀五年(七二八年)後の心情——冷やかに現実をみつめ知り得たことから起る心情——を吐露したものであっただろう(後述参照)。そしてその心情は、作者と同時代の懷風藻に見える貴族官僚らの詩が漢籍を典拠にして詩境を表現したように、漢籍の知識によることで形をなしているようだ。旅人が漢籍の詩文を知識として作詩する習慣を有していたことに讃酒歌の歌われる外的事情がある(旅人には懷風藻に、「初春侍宴」の五言詩、万葉集卷五の「報凶問語」の条に、七言詩がある)。

そこで、この小稿は、讃酒歌の内の三首に見える「醉哭(泣)」の用語に注意して、それに託した旅人の心情を把握することを目

の飲酒への態度が窺えよう。344の、「あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る」の歌も、「賢しらをす」る「酒飲まぬ人」を猿に比擬することで否定していると考えられ、上の三首と類似する発想が認められる。猿を否定の比喩とする典故は確かめ得ないが、例えば唐の伝奇小説に、芸文類聚の編著者である歐陽詢を誹謗するために著作したとする「補江總白猿傳」がある。そこに猿に似ることを嘲笑の具に用いている。旅人の例は人に似て人ではないことを意味として持つであろう。「猿に似る」という表現は「さかしら」の振舞いに似ていても旅人には真の「賢良」と認められないことを言うようである。また、345の「價無き寶といふとも一坏の濁れる酒にあに益めやも」の歌は、仏教で比喩に言う無価宝珠と「一坏の濁酒」との比較、346の、「夜光る玉といふとも酒飲みて情をやるにあに若かめやも」の歌は、世間に貴価とされている夜光の珠と飲酒による遣憂の行為とを比較して酒に貴い価値があると述べる。上の、本来、価値的に一対となるべくもない物を比較し酒を無上の物とする考えのある例を知ると、旅人にとって「酔泣」の行為は、単なる酒癖としてのそれではなく、飲酒における価値行為であると推測し得る。それは如何なる觀念によつて無上の価値となつたであらうか。

340の、「古の七の賢しき人どもも欲りせしものは酒にしあるらし」の歌に見える「古之七賢人」の用語は、好んで飲酒に耽つたと伝えられている竹林の七賢人の伝に依る。そのことは一般に認められているところである。その「竹林七賢」の人物の伝を載せる書は、三国志や晋書の史書、および世説新語、文選等であり、ま

た、それらの注に多く引用されている中興書、王隱の晋書、晋陽秋、名士伝、竹林七賢論等である。その中で古いと見られる資料の一つは次の記事であろう（便宜の爲に人名に傍線を施し、訓点を付す。以下の引用においても同じ）。

陳留阮籍、譙國嵇康、河内山濤、三人年皆相比、康年少亞之、預此三契二者、沛國劉伶、陳留阮咸、河内向秀、琅邪王戎、七人常集于竹林之下、肆意酣暢、故世謂之竹林七賢、（世説新語任誕篇）

これは、常に七人が竹林の下に交會し酣飲したことを伝えている。では、日本には、竹林七賢はいかに伝わっていたであろうか。

懷風藻の釋智藏の詩の「因妓竹林友、榮辱莫相驚、」（秋日常志）に、竹林の故事が作者の道家的心境を表わすために用いられているし、また、下毛野蟲磨の「祖錢百壺、敷二寸一而酌賢人之酌、琴書左右、言笑縱橫、物我兩忘、自拔宇宙之表、枯榮雙遣、何必竹林之間、」（略）」（秋日於長王宅宴新羅客一首、并序）の例にも、老熟した濁酒百壺を酌む饒別宴は盛大、且つ風雅の極にあり、その遊に世俗のことから逸脱する感を得たと述べる。これは竹林の間に飲酒し、清談した脱俗の七賢人の故事を意識して、それに詰抗する状況を描出しているといえる。藤原宇合の序、「勢無劣於金谷、榮翰良友、數不_レ過_二於竹林_一、」（暮春曲宴南池二首并序）にも、それは明かに見える。所謂竹林の七賢人の伝は、奈良朝知識人に熟知されていたといえる。また、藤原萬里の、「僕聖代之狂生耳、直以風月爲情、魚鳥爲_レ醜、貪_レ名

狗利、未適冲襟、對酒當歌、是諧私願、……千歲之間、嵇康我友、一醉之飲、伯倫吾師、不慮軒冕之榮身、徒知泉石之樂性……(略)……(五言、暮春於弟園池置酒、并序)の言にも、飲酒し世の榮達の外に生きようとする竹林七賢の行為は知られていたことが確認し得る。その萬里の詩に、「城市元無好、林園賞有餘、彈琴仲散地、下筆伯英書……寄言禮法士、知我有龜疎」と、礼法の士に対する竹林の七賢のごとき我を誇示する例が見える。犬上王の「遊覽山水」詩の「留連仁智間、縱賞如談倫」の句に、隱逸、清談の徒としての竹林七賢の故事を写している。時代は下るが、日本国見在書目録には、雜伝家に、七賢伝一卷、竹林七賢伝五巻孟氏撰、小説家に、世説十巻宋臨川王劉義慶撰、劉孝標注、雜家に、芸文類聚等の多くの類聚書、惣集家に、文選卅子昭明太子撰、文選李善等の書名が見えていることから、竹林七賢の伝について当時知識としてあつたことが確かめられよう。奈良朝人の風尚に、竹林七賢の飲酒と超俗任達の行為への憧憬の念が認め得れば、上の340の歌も、そのような時代の風尚と前掲書等の知識によつて生まれたと見て大過無かるう。それは、「古之七賢人」の飲酒の行為に己れの嗜酒の情を投影しているといえよう。

ところで、三国志魏志の徐逸伝、芸文類聚酒部(魏略引)および北堂書鈔酒部(魏志引)に見える徐逸の故事を詠んだらしい339「酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしさ」という歌がある。その「古昔大聖」の用語は、「古之七賢人」と同義の觀念を表わす語であるから、徐逸は竹林七賢人と比肩する。が、大聖の語で、また竹林の士の先達として徐逸が称される例は、漢籍に見

えないようだ。

では、その用語は何故に生じて来たのか。それは、六朝時代の詩、そしてそれを模倣した懷風藻の詩中にしばしば用いる一句中に同音(字)を繰り返す修辭法(例えば、釋辨正の「日邊瞻日本、雲裏望雲端」(在唐憶本郷)の例)に倣つて、「酒の名を聖と負せし……大き聖……」との繰り返しにより修辭上「大聖」の表現が生じたのか、或は、340の「古之七賢人」の對の歌として、「聖賢」の飲酒を歌う意図から、「古昔大聖」なる表現があるのか。兩方の由来が推測される。とにかく、徐逸に「大聖」の語を配した旅人の意識は一考を要する。339の歌の故事を見よう。

藝文類聚に引く魏略には、次のように見える。
魏略曰、太祖時、禁酒而人竊飲之、故難言酒、以白酒爲賢者、清酒爲聖人、

また、北堂書鈔に引く魏志には

魏志曰、徐邈、字景山、爲尚書郎、時科禁酒、而私飲至三於沈醉、校事趙達問以曹事、邈曰、中聖人、

と見える。「大聖」の語は、道德すぐれた人物に対して用いられる。そのことは旅人も知るところであつたらう。禁科を無みして飲酒した嗜酒振り、平然と酒を聖(清)、賢(濁)と洒落のめす徐逸を大聖と呼称する用語には、讀酒歌を貫く彼一流の態度を認め得る。340の歌も、世事から脱れて飲酒した竹林の七賢への讃歌である。339、340の一对の歌の主題は、懷風藻の詩にしばしば見えた風尚、即ち世俗を超脱し、飲酒談論することを賞讃、憧憬することといえよう。

ここで、竹林の七賢人の代表人物として伝えられていたらしい阮籍の伝を見ながら、その「飲酒」の持つ意味を概観しておきたい。それは旅人の讃酒歌と関連を有するようだ。

晋書、列伝十九卷の阮籍（二一〇年生、二六三年卒）の伝の冒頭に次のように見える。

阮籍、字嗣宗、陳留尉氏人也、父躡、魏丞相掾、知名於世、籍、容貌瓌傑、志氣宏放、傲然獨得、任性不羈、而喜怒不形於色……博覽群籍、尤好莊老、嗜酒能嘯善彈琴、當其得意、忽忘形骸、

この伝によれば、(1)阮籍（建安七子の一人）を父とする名門の子弟であること、(2)情の趣くままに振舞い世の礼俗に拘泥しなかったが、反面、感情を顔色に現さぬ程の慎重な人となりであったこと、(3)莊子、老子の思想を好んだこと（因みに、大人先生伝、達莊論、老子贊等の道家思想に関する著作がある）、(4)酒を飲んでは、嘯号し、或は琴を奏したこと等が紹介される。世説新語（以下略して世説と記す）任誕篇の注に引く竹林七賢論には、「諸阮前世皆儒學、善居室」とあるから、阮一族はもとと官僚として世にあったといえる。また、阮籍も官吏の道を歩むことになる。その伝に次のようにある。

阮籍、本有濟世志、屬魏晉之際、天下多故、名士少有全者、由是不與世事、遂酣飲爲常、

阮籍は、本来政治に参畫しようとの志を持っていたが、魏晉の王朝の交替期に當り世の中には變事多く、名士で壽命を全う

する者は稀であった。だから、阮籍は事（政争、官界の交遊）になづまず、したたか飲酒することを日常のこととした。

阮籍は、漢から魏へ王朝が移譲する頃に生まれ、魏の王権が衰えて司馬懿・司馬師が抬頭し、結局、司馬昭（懿の子、師の弟）が相国・晋公・九錫の命を受ける年、司馬昭が禪讓によつて晋王朝を創立する前年までの間、所謂、政変激動期を一生の時とする。阮籍は尚書郎任官を始めとして、名士なるが故に招聘されて、太

傅司馬懿の從事中郎（阮籍四十歳）、大將軍司馬師の從事中郎、散騎常侍（四十五歳）、その後、司馬師病没し、その弟の昭が大將軍となる（四十六歳）頃、東平太守、歩兵校尉となる等、魏朝で政治權力を強めてゆく司馬氏の側に身を置いていた。晋書の伝には、新興勢力の中核近くに在る故に、政争から生ずる危険を脱れるべく酒に輜晦して身を全うしたと伝える。その例として、司馬昭が長子司馬炎のために阮籍の娘との結婚を意図していた折、阮籍は六十日間酔い続けてその話を切り出すことを断念させた（晋書）とか、鍾会が阮籍に現在の政治について問ひ、その答えいかんによつて罪に落そうと企てたが、阮籍はそのつどしたたかに酔つて免れた（晋書）との話を伝える。しかし嵇康の「與山巨源絕交書」（文選卷四十三所収、景元二年の著作）に、「阮嗣宗、口不評論人過、吾每師之、而未能力及、至性過人、與物無傷、唯飲酒過差耳、至爲禮法之士所繩疾之如讎、幸賴大將軍保持之耳、」と見える阮籍の伝は、上の例と異なる。阮籍（當時、五十二歳）の言動は至慎で、人と争うことも無いが、ただ酒において度を過ぐす、だから、礼法を尊ぶ人々に憎まれているが、大

將軍(司馬昭)に庇護されて無事なのだと伝えている。酒に酔って礼を乱したとの話は、王隱の晋書に、「魏末、阮籍嗜酒荒放、露頭散髮、裸袒箕踞、其後貴遊子弟阮瞻、王澄、謝鯤、胡毋輔之之徒、皆祖述於籍、謂得大道之本」(世説、德行篇)と見え、所謂、八達の祖と記される例や、司隸の何曾が喪に居て飲酒する阮籍(四十六歳以後)を不孝敗礼と責め、その処分を司馬昭に進言した(世説任誕篇注引晋紀、魏氏春秋、文選注引晋陽秋)例に見える。

更に、阮籍の飲酒は胸中にごろごろしている磊を静める為に酒を注ぐのだ(任誕篇)との評も見える。このみかたを、詠懷詩八十二首の詩に見える鬱屈した思いを抱く阮籍の姿が裏づける。

「夜中不能寐、起坐彈鳴琴、……徘徊將何見、憂思獨傷心、」の句に、また、魏氏春秋の、「阮籍常率意獨駕、不由徑路、車跡所窮、輒慟哭而反、」(世説、棲逸篇注引)に伝えている。

その子阮渾が竹林の風に倣おうとした時、阮咸が仲間に入っている、お前はもうそうしなくてもよいと戒めた話(任誕篇)が伝わっている。その話に阮籍の醒めた心底が窺える。

阮籍の飲酒は、魏晋の陰惡な政情、見せかけの礼を尊ぶ世に処する為に故意になしたことのようである。任誕篇の次の二話を見よう。

阮籍嫂嘗還家、籍見與別、或譏之、籍曰、禮豈爲我輩設也、

籍鄰家處子有才色、未嫁而卒、籍與無親、生不相識、往哭盡哀而去、其達而無檢、皆此類也、(注引王隱晋書)

世の形式的偽善的礼の拘束から脱れて生きる阮籍の姿を伝えている。儒家の礼が人の本来のありかたを曲げるとし、遵守するに足りぬとする阮籍の考えは、「大人先生伝」に詳しく見えている。阮籍が、儒教の礼、世俗を無視し、人としての心情を尊んだことは、次の話によく現われている。

阮籍嘗葬母、蒸一肥豚、飲酒二斗、然後臨訣、直言、窮矣、都得一號、因吐血、癢頓良久、(世説任誕篇および晋書の傳)

阮籍は母を埋葬する日に、一匹のふとった豚を蒸して酒肴とし酒を二斗飲んだ。そして別れを告げる段になると、「窮す!」と言って、ただ一泣きすると悲しみの餘り血を吐き、しばらく氣を失っていた。

鄧粲の晋紀(前条の任誕篇注引)、晋書の伝には、母の臨終の時にも、「既而飲酒三斗、舉聲一號、嘔血數升、癢頓久之、」のことがあったと伝えている。

△附・参考▽

王戎、和嶠同時遭大喪、俱以孝稱、王雞骨支牀、和哭泣備禮、武帝謂劉仲雄曰、卿數省王和不聞和哀苦過禮、使人憂之、仲雄曰、和嶠雖備禮、神氣不損、王戎雖不備禮、而哀毀骨立、臣以和嶠生孝、王戎死孝、陛下不應憂嶠而應憂戎、(世説德行篇)

この話は、注に引く晉陽秋により詳しい。(譯)「王戎が豫州刺史であった時、母の死にあった。彼は、生れつき至孝であったが、服喪は禮にこだわらず酒を飲んだり肉を食ったり、ある

時は人が其葬に與するのを眺めたりしていたが、身體はすっかり悲しみに瘦せ衰え、杖にすがつてようやく立ち上る程。同じ頃、汝南の和嶠は禮法を遵守することを自負していた。彼も母の喪に居たが、穀物も量って食べる程の禮の守りかた。しかし悲しみにやつれることでは王戎に及ばなかった。……武帝（司馬炎）は、このことで王戎の方がすぐれていると言った。」

潛確居類書七十に引用する典故に次の話（校箋世說新語十六頁に楊勇氏指摘）がある。

戴伯鸞母卒、居廬啜粥、非禮不行、弟叔鸞食肉飲酒、哀至乃哭、二人俱有毀容、世謂、伯鸞死孝、叔鸞生孝、

礼記には、服喪の礼を詳細に定めている。疾病の人以外は肉を食べてはいけなし、酒も止める、飯も三度は食せず次第に瘦せ衰えねばならない。それが死者への哀悼の氣持の現われだとする。阮籍は形式上礼によつて哀哭することより酔ひ号泣する。その行為に真実に死者を悼む情があると考えている。魏氏春秋には、阮籍は生まれつき大変な親孝行者だが、服喪のしかたは定めぬ礼に従わなかった。しかし、悲しみに生命も消え入らなばかりの様子であった（任誕篇注引）と言ひ、干宝の晋紀にも、魏晋の頃に礼を無みし世に傲る方外の人士で、（礼法の土よりも）反つて眞実の礼を行なつた者は、阮籍である（任誕篇注引）と述べて、阮籍の礼教無視の行為に、親に対して自然に生じた誠実な服喪のありかたがあると讀める例が見える。

上に見てきた伝によれば、至孝、純情、至慎の内面と、方外、

任達の徒としての阮籍の像が現われる。阮籍の酒は、人となり純粹なるが故に鬱積する憂憤を發散する為のものであったと思われる。飲酒に耽けることで政治体制や礼俗からアウトサイダーとして生き得た。一は、魏晋の政争峻烈の中に韬晦して生きる為であり、一は、世間の偽善的礼の束縛から自身の純情至孝の情を歪曲させない為であった。（首陽山賦「分素の情一を懷き、……」や、大人先生伝に君子人の世界の否定、礼教への憎惡の念が見える）。阮籍は飲酒して「方外」の世界に身を置き、「方外」に遊ぶことに生來の純な内面の発露をなしたといえる。それ故に、阮籍の一生は、司馬氏の保護があつたとはいへ、常に官僚礼法の士からの非難の中にあつた。晋書にいう、「天下多故、名士少有全者、」の時代の中を、司馬昭の評のように「至慎」なる処世態度で、天寿五十四年を全うした。景元四年（二六三年）嵇康が呂安事件に連坐して刑死（行年四十歳）した翌年、病没。

さきに、旅人は、世間の認める価値を越えるものとして「醉泣」を礼讀していると考へた。今、阮籍の伝について見た所では、「醉泣」は、世間の礼法を無視し己れの哀しみの眞意を表現する為の行為であつた。自己の心情を表現する時、人の心情を形式美たるべく規定する礼法は偽善的形骸となり果てらる。竹林の七賢の目した任達、不羈とは形式を打破して自己の心情を直截に表現する行為を意味する。人の自然な感情の表現を美とする考へは、礼法の「文」、常識的価値観の世界と価値を逆転した、反対のみかたを取つて成り立つ。

347 世のなかの遊びの道にすずしくは酔泣するにあるべからし

この歌に物語らんとする旅人の主題は何であらう。「世のなかの遊びの道」に対して「酔泣」が優位に立つ行為であることを言う。「世のなか」の語は、351の歌、803の詞書「況乎世間蒼生、誰不愛子乎」、804の「哀世間難住調一首并序」の題詞と歌の例などに見える。「世間」という漢熟語の訓読みであり、従来の解釈のように、この世、現在世の意味であらう。「冷者」の訓には、およそ二様の説があるようだが、後述する帰結として荒涼の意でスズシとする訓に従いたい。「世間の遊びの道」は、「竹林之遊」（世説傷逝篇、晋書嵇康伝、懷風藻中に見える）、即ち、「飲酒に耽り、樂しび遊ぶ、」ことと、暗に対偶する意味を持つ旅人の造語ではないだろうか。「竹林之遊」、「世間之遊道」の類似する熟語表記の形、更に「竹林」（脱俗の境界）、「世間」（俗界）と対の世界を表わす意味を持つ。この一首の構成は、竹林の七賢の伝、多分、阮籍の話によるものであらうと思われる。阮籍の伝に見たように、飲酒は、世間の範疇を超越する為の行為である。そうであれば、旅人の一連の「さかしら」否定の思いが、「酔泣」の行為を素樸に真情を表現する行為として捉えるであらう。

「俗世間の遊びの道に興醒めるのであれば阮籍のやつたという酔泣をこそやるべきであらう」との、礼俗否定の歌であらう。

この歌は、345、346の歌と一群をなすのではないだろうか。「世間之遊道」が、世間の人々に面白しと興じられている遊びを意味するようだ。345、346、347の歌が世の人の貴ぶものに比して飲酒の

価値をたかしとする主題を一貫して持っていると考ええる。

341 賢しみと物いふよりは酒飲みて醉哭するしまさりたるらし
350 默然をりて賢しらすは酒飲みて酔泣するになは若かずけり

この二首は、等しく「あひなき」を讃美することを主題としている。しかし、傍線部の「賢」とされている行為は、「物言」とも「默然居」と対をなす異なった行為である。また、死者を悲んでなくことを本義とする「哭泣」の語が、341の哭、350の泣と対の語として用いられている。341と350とは、二様の「賢」を対象として挙げて、「醉哭」「酔泣」に比し、否定することを歌うが、それは、意図的に作歌した跡を示しているのではないだろうか。

まず、「醉哭（泣）」が何を意味するのか、改めて考えてみよう。阮籍の伝に、飲酒して「窮矣」と母との死別に哭泣する話が見え、その礼法無視の行為が賞讃されたという記録、そして王戎と和嶠、戴伯鸞と叔鸞の服喪の様子と悲しみの深さを伝える話（前後の「生孝」「死孝」の評価の異なりは、記録者の立場によるだろう）、それそれが死者に対して葬礼にこそ適わぬ行為ながら、哀悼の心情の深いものとされていた。

儒家の礼で哭泣は、本来、死者を悼む儀礼であるが、その儀礼の形式から脱する為に、ことさらに飲酒が行なわれたと見られる（例えば、前に引用した任誕篇の、「阮籍嘗葬母、……飲酒二斗、然後臨訣、……」の条に注意されたい）。酔って哭泣する行為は近親と死別する方外の人々の行為とみることが出来る。そうであれば、341の歌は、「愛する者を亡くした悲しみを利巧ぶってあ

これこれ言うより酒を飲んで酔哭する方がその追悼の情はまさって
いるらしい。」との意にならう。口賢しき礼法の士の悲しみかた
より、礼法にはずれていても人情のままにする酔泣きの方に強い
感動を覚えると言うのであろうか。旅人には老妻を任地に亡くし
たという悲しみの感情があつた。そのことも「酔哭」が何よりも
深い悲しみの心情を表わすと共鳴したのであろう。339、340、341と
飲酒に関わる人の行為を伝える故事によつていえる。

350の歌の「默然をりて賢しらす」の句も典拠を持つ。世説文学
篇の、「支道林造^二即色論^一、論成^一示^二王中郎^一、中郎都無言、支
曰、默而識^レ之乎、」の「默」の注に、

維摩詰經曰、文殊師利問^二維摩詰^一云、何者是菩薩入^二不二法
門^一、時維摩詰默然無言、文殊師利歎曰、是真入^二不二法門^一者
也、

とある。「默然無言」は、仏の悟りに入ることを表わしている。
維摩詰が空義を説く般若経とともに東晋の知識人にもてはやされ
たことは、文学篇に伝える殷浩の話にもよく知られるが、上の支
道林と王中郎（担之）の会話からも、そのことは明らかである。
維摩詰と文殊の對話は、維摩詰が病臥したとき、仏の身代りとし
て病氣見舞いに來た文殊と病室で三千の弟子を聴衆として行なつ
た「不二法門」の奥義の討論である。旅人も、巻五、雑歌の「太
宰帥大伴卿報凶門^一調」に続く「愛河波浪已先滅、云々」の漢詩
の詞書に、「所以、維摩大士在乎方丈、有懷染疾之患、釋迦能
仁、坐^二於雙林^一、無^レ免泥洹之苦、故知、二聖至極、……」と記
しているから、維摩詰について知つていたことは認められる。ま

た、聖徳太子の「三経義疏」の一である「維摩経義疏」、三論宗の
智光の「浄名玄論略述」があることから知られるように、維摩経
は当時愛読されていたと言えらる。「默然無言」は、「維摩の一黙」
「默不二」として知られている。

「默然をりて賢しらす」の典拠に維摩経の、上の話を考える
ことが妥当であれば、350の歌は、「だまりこくつて仏の悟りに入
るという僧のさかしらは、酒を飲んで心情のままに（竹林の賢人
が）酔泣きするのに、やはり及ばないことのようにだ。」との仏者
の悟入をも「酔泣」に及ばぬと否定する意にならう。

348 今の世にし楽しくあらば來む世には蟲にも鳥にもわれはな
りなむ

349 生者つひに死ぬるものにあれば今の世なる間は楽しくあら
な

350の歌に先立つ二首にも、それぞれ來世彼岸よりも現世に楽し
く暮したい、諸行無常であるならば折角の生を享樂しようと言
い、仏教の所説に背く内容を歌っている。346、349、350の歌は、現
世を肯定する。

讃酒歌十三首の構成についていくつかの論があるが、上に考え
た所をまとめると、次のような形を見る（詳しくは他日述べる）。

(A) 338の「驗なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくある
らし」の、酒を忘憂物として賞讃する歌。

(B) 339、340、341の飲酒を愛した人の故事を典拠とした讃酒の三
首。

(C) 342の「言はむ爲便せむ爲便知らず極りて貴きものは酒にし

あるらし、343の「なかなか人にとあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ」、そして344の歌。酒を最上とし、死しても壺となって酒に染みていたく思ひ、酒を嗜まぬ人を見ると猿かと思うという、酒を無類のものとして賞讃する三首の歌。

(D) 345、346、347の、通常の価値概念を否定して酒の価値を言挙げする三首。

(E) 348、349、350の、仏の教えよりも、現世に酒を飲んで楽しむことに生の意義があると歌う三首。

讃酒歌のなりたちが、このように整然とした形をなしていること、十三首それぞれが典故を持つこと、そして修辭の技巧の点からも、旅人は讃酒歌を詠むことに對する知的関心、興味を注いでいると感じる。勿論、旅人自身が酒を愛しもし、また、典籍に見える中国の愛酒家たちの行為に共感するものがあつたといえよう。殊に繰り返し用いられた「醉哭（泣）」の行為に對する感動は、旅人には妻の死を通じて必然なるものであつたように思う。懷風藻の詩の中に見える竹林七賢の典故は、生動する詩語となり得ていず、それは単なる中国文化への憧憬を歌うに過ぎなかつたようであるが、上に述べてきたことに太過なければ、旅人の場合は己れの心情を語らんとして故事を用いているといえよう。「醉哭（泣）」の典故を含む歌が、作者の、俗世間と仏教とに安心し楽しむ得ない姿を現わしている。

(四十八年三月)

注1 「讃酒」が文学として現われることについては、大矢根文次

郎先生の「陶淵明研究」六一七～六一九頁を参照されたい。また、漢熟語の用例については、小島憲之氏の「上代文学と中国文学・中」九三一頁参照。ただし、後に述べるように、更に加うべき用例がある。

2 古典文学大系「万葉集」をテキストする。傍線は論者。341は、原表記に従い「醉哭（醉ひなき）」に改める。

3 五味智英氏は「讃酒歌のなりたち」（『国語と国文学』四十四年十月特輯号）で、「實しら」と「醉泣」に注意している。

4 この解釋は一般に行われているが、例えば、胡應麟の四部正僞に、「白猿傳、唐人以謗歐陽詢者、詢狀頗瘦、類猿、故當時無名子造言以謗之、」と見える。

5 福井文雅氏の「竹林七賢についての一試論」（フィロソフイア第三七号、九六～九七頁）参照。なお、阮籍伝としては、吉川幸次郎氏の「阮籍伝」（吉川幸次郎全集第七卷所収）、「ある抵抗の姿勢——竹林七賢」（新人物往来社、現代人のための中国思想叢書7）等がある。

6 古典大系「萬葉集（一）」三五三頁。小島憲之氏の「国風暗黒時代の文学（上）」四二七～四二九頁。

7 福井文雅氏の前掲論文、八七頁。

8 五味智英氏の前掲論文。稻岡耕二氏の「憶良・旅人私記——讃酒歌の構成をめぐって——」（『国語と国文学』昭和三十四年六月号）

9 津田左右吉先生の「文学に現われたる国民思想の研究——」一七二頁参照。